琉球列島出土土師器、須恵器の基礎的研究

― マツノト遺跡出土土師器の検討 ―

新里亮人
伊仙町教育委員会

AKITO Shinzato
Board of Education
Isen Town

はじめに

奄美諸島における古代・中世並行期の遺跡からは、土師器、須恵器が一定量出土することがある。池畑耕一（池畑1998）や高梨修（高梨2005）の集成によると、奄美大島６遺跡、喜界島５遺跡、徳之島１遺跡、沖永良部島１遺跡の計13遺跡で土師器、須恵器が発見されている。

マツノト遺跡もその例外ではなく、土師器の椀、甕が検出された。ここでは、マツノト遺跡から出土した土師器の年代について、九州地方における古代土器生産の動向と照らし合わせながら検討してみたい。

１．マツノト遺跡出土土師器の特徴

マツノト遺跡の第一文化層からは、計25点の土師器が出土している。本文化層は兼久式土器が主体的に出土する砂層であり、須恵器、鉄製品、銅製品、ガラス製品等が検出されている。出土した土師器の器種は碗、甕である。以下にそれらの観察所見と特徴について述べてみたい。

(1) 土師器碗（図１）

椀は計３点（内２点は同一固体）出土している。

１は小型の碗であり、復元口径は11cmを測る。第１文化層12区から出土した。回転台によって製作されており、外面には明瞭な稜線が認められる。焼成は良好で、胎土は比較的粗い。高台の有無は不明である。内面には赤彩が施される。

２は回転台成形による高台付椀である。第１文化層７区より検出された。口径13.0cm、器高7.7cm、高台径9.0cmを測る。高台径が広く、高脚な形状である。体部は曲線的で、口縁がやや外開き気味に立ち上がる。焼成は良く、胎土は緻密かつ良質で、色調は明橙色を呈する。器面に触れると細粉が付着する粉質な質感をもつ。器壁は４から５㎜程度で非常に薄く、繊細に仕上げられている。

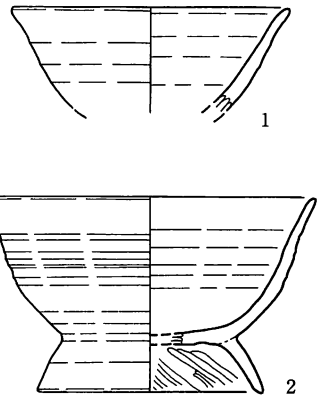

図１　マツノト遺跡出土土師器椀
（S＝１／３）

(2) 土師器甕（図２）

土師器甕は22点検出されており、うち口縁を残す資料は５点ある。胎土がやや粗く、色調は黄白色を呈する一群である。

外器面にハケ目調整、内器面にケズリ調整が確認できる。ケズリ調整は強く深めに施されており、明瞭なケズリ痕が残されている。そのため、胴部と口縁部の境には明瞭な稜線がめぐる。頸部内器面

には、横位のハケ目調整により平坦面が形成される。

甕の頸部の屈曲点に粘土継ぎ目が確認できるので、胴部と口縁部を明確に区別して製作されたと見られる。4は、ケズリ痕の上に粘土が被さっている状況が確認でき、胴部ケズリ調整の後に口縁部に粘土を貼り付けたことを示す資料である。口縁部には弱い回転によるナデ調整が行われている。胴部に回転調整は認められないので、胴部成形、調整の後、口縁部が製作されたと考えられる。

胴部の張りは弱く、最大径は口縁部にある（胴部最大径<口径)。口縁は緩やかに外反するもの（1～3）と外折気味に大きく開くもの（4、5）がある。

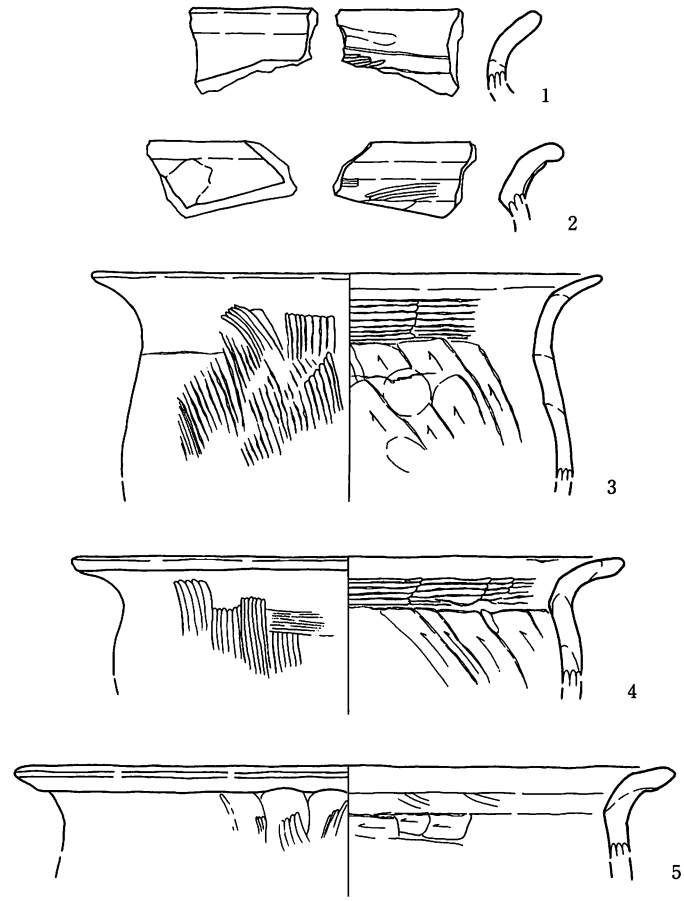

図2　マツノト遺跡出土土師器甕
(S＝1／3)

(3) 土師器模倣甕（図3）

マツノト遺跡からは、土師器甕を模倣した土器も出土している。色調は赤褐色を呈し、石灰質の混和材を含む。内器面にケズリ調整が施されており、上述した土師器甕の製作技法の影響が認められる。ただし、口縁部が短く外傾する形状、ケズリの方向、ハケ目調整が施されないなど相違点もある。

これらが同一文化層から出土した土師器と同時代の資料という前提に立つと、土師器甕を忠実に転写したとは言い難く、見かけ上の模倣にとどまっている感は否めない。

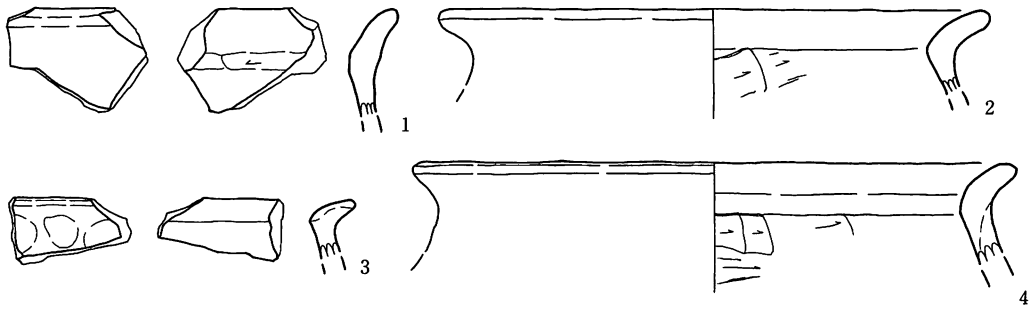

図3　マツノト遺跡出土土師器模倣甕（S＝1／3）

表１　マツノト遺跡出土土師器、土師器模倣土器観察表

図	番号	器種	出土地	口径(cm)	器高(cm)	成形、器面調整など						胎土	混和材	焼成
						外器面			内器面					
						口	胴	底	口	胴	底			
1	1	椀	12区	11.0		回転ナデ	回転ナデ		回転ナデ	回転ナデ 赤彩		粗い	石英	良好
	2	椀	７区	13.0	9.0	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	ナデ	緻密	角閃石	良好
2	1	甕	５区上			ナデ			横ハケ目	ケズリ		粗い	輝石 石英	良好
	2	甕	10区			横ナデ			横ナデ ハケ目			粗い	輝石 石英	良好
	3	甕	上層	20.0		横ナデ 縦ハケ目	縦ハケ目		横ナデ ケズリ 横ハケ目	縦ケズリ 指押さえ		粗い	輝石 石英 褐色鉱物	良好
	4	甕	６区	22.0		横ナデ	縦ハケ目		横ナデ横 ハケ目	縦ケズリ		粗い	輝石 石英 褐色鉱物	良好
	5	甕		26.0		横ナデ 指押さえ	縦ハケ目		横ナデ 斜ハケ目	横ケズリ		粗い	輝石 石英 褐色鉱物	良好
3	1	甕	４区上			横ナデ	ナデ		ナデ	横ケズリ		粗い	石灰岩 石英	良好
	2	甕	17区	24.0		横ナデ	ナデ		横ナデ	横ケズリ		粗い	石灰岩 石英 輝石	良好
	3	甕	３区			横ナデ 指押さえ	横ナデ		横ナデ	横ケズリ		粗い	石灰岩 石英	良好
	4	甕	12区	22.0		横ナデ	横ナデ		横ナデ	横ケズリ		粗い	石灰岩	良好

２．九州地方における古代土器の動向

さて、これらの土師器はどのような歴史動向の中で奄美大島へ持ち込まれたのであろうか。縄文時代から古墳時代併行期における琉球列島の遺跡からは、九州地方で製作された土器が出土し（曽畑式土器、免田式土器、成川式土器など）、逆に琉球列島の土器や南海産貝製品が九州地方で発見されるようになる。さらに、中世に至ると長崎産の滑石製石鍋が琉球列島全域へと流通し、先島諸島を含めた経済状況が出来上がる。時代によって状況は異なるが、先史時代以降、琉球列島と九州地方の交流関係があったことは明らかである。

律令時代前後における琉球列島の歴史的状況を踏まえると、マツノト遺跡出土土師器も九州地方との関わりの中でもたらされたと想定できる。ここでは九州（特に九州北部、中九州、南九州）における古代の土器研究を概観し、土器生産の動向を確認していきたい。マツノト遺跡出土土師器の特徴でもある回転台成形土師器の出現以降、すなわち８世紀以後の土器様相を中心に見ていくことにする。

（1）九州北部

九州北部における歴史時代の土器研究は、大宰府近辺の食器研究を中心に進められてきた。これらは、大宰府条坊跡の各遺構から検出された供膳具（杯、皿類）の分類から始まり（森田・横田1976、

前川1978)、椀の形式細分と変遷からその歴史的背景を探る研究や（中島1992)、煮沸具、貯蔵具を含めた食器構成を総体的に把握する研究が進められている（中島1995、2001、山本1988、山本・山村1997)。

分析の手法や形式分類の詳細はそれぞれの論考に譲るが、大宰府周辺における土師器椀は、須恵器を原型とした直線的な形（Ⅰ類）から金属器、瓷器系土器を指向した丸みを帯びた形態（Ⅱ、Ⅲ類）へと移り変わり、その画期は９世紀末から10世紀初頭に位置付けられている（中島1992)。

また土師器甕は、古墳時代の系譜を引く甕Ⅰ類（頸部の屈曲が強く、胴の張りが強もの）→８世紀代から新規に出現する甕Ⅱ類（胴が張らず、最大径が口縁にある）→タタキ成形による甕Ⅲ類へと変化する（中島2001)。11世紀頃には煮沸形態が鍋型へと移行していく（山本・山村1997)。

(2) 中九州

中九州（特に熊本県域）における古代土器の編年研究は、窯業生産遺跡出土資料（松本他1980）と消費遺跡出土資料（網田1994a、ｂ）の検討が進められている。網田は、大宰府の食器様相との比較、熊本県内における須恵器生産との関連、広域流通品（越州窯青磁、緑釉陶器など）との共伴状況を主軸に分析を行なった。以下にその概要をまとめてみたい。

回転台土師器は８世紀前半代に出現する。土師器椀の器形は益城郡に所在する須恵器窯製品と類似するが、９世紀前半頃から画一的な直線形態の椀が製作される。その後10世紀前半頃から曲線的な形態で高台が高くなる椀が出現し、少なくとも10世紀後半まで同系統のものが確認できる。赤彩が施される椀は８世紀後半から10世紀中頃まで一般的に認められる。

煮沸具の検討は中村和美によって進められている（中村1996)。８世紀後半頃に口縁部が強く外反した胴部の張らない甕が出現し、その系統のものが９世紀代まで継続する。

(3) 南九州

南九州では、火山灰の噴出年代（開聞岳噴出物層、推定年代874年）を応用した土器編年が行われている（下山1993)。中村和美はこれを継承し、広域流通品、遺構の新旧関係を基に薩摩、大隈両地域における土師器、須恵器の動向を述べた（中村1994、1996、1997)。近年は、鹿児島県における古代食器の総括的検討も進められている（松田2004)。

薩摩地域では８世紀後半代から回転台使用の土師器（供膳具）が製作されるようになる。その形態は、須恵器に類似しているが、９世紀後半代に、体部が丸みを持つ椀（中村分類椀Ａｂ１）及び円盤状の底部を持ついわゆる充実高台の椀（中村分類Ｃ類）が出現する。赤彩椀もこの頃に認められる。

煮沸形態は成川式土器（弥生時代後期～古墳時代）系統の脚台付甕が８世紀後半から９世紀前半頃まで製作されるが、８世紀後半代に外器面ハケ目、内器面ヘラケズリが施される土師器甕が出現する。その形態は、口縁が長く、外反し、胴部が張るもの（松田１類）と直線的な胴部のもの（松田２類）が９世紀前半代まで共存する。その後９世紀後半代に短い口縁がＬ字状に折れ曲がる形態となり（松田７、８類)、10世紀中頃に器高が低くなり、口縁がさらに短く、くの字状に屈曲した形態へと変化する。

(4) 九州地方における古代土器の様相

九州北部、中九州、南九州における土師器の動向を供膳具、煮沸具の別に表２、表３にまとめた。製作技術、系統関係に着目すると、九州における古代土器生産にはある共通点を見出すことができ、これらの基準要素を律令時代的な土器動態と捉えられそうである。

回転台土師器は８世紀代に出現する。３地域ともに在地の須恵器と類似した形態の供膳具が製作されており、須恵器の製作技法と形態が土師器に受け継がれている。須恵器供膳具の生産が減少する９

世紀後半代以降、須恵器系譜の直線的形態のものから金属器、瓷器系統の曲線的な椀が製作されるようになる。

煮沸用の甕類は、古墳時代の在地土器に系譜を辿れるものが８世紀代まで製作される点で共通する。８世紀後半には、口縁が大きく外反ないし外折する胴部が張らない形態のものが出現し、その系統のものが10世紀代まで存続する。胴が張らない直線的な器形のものは律令時代的な甕と考えられる。ただし、供膳具ほど敏感な型式変化を見せず、なおかつ地域によって独自の変遷を辿るようである。

表２　九州における古代土器生産の動向（供膳具）

年代	北部九州	中九州	南九州
８世紀	回転台土師器の出現 直線的形態 （須恵器系譜）	回転台土師器の出現 （須恵器系譜）	
			回転台土師器の出現 直線的形態 （須恵器系譜）
９世紀		直線的形態 （形態の斉一化）	充実高台椀の出現 曲線的形態 （金属器、瓷器系譜）
	曲線的形態 （金属器、瓷器系譜）		
10世紀		曲線的形態 （金属器、瓷器系譜）	
		小皿の出現	小皿の出現
11世紀			

表３　九州における古代土器生産の動向（煮沸具）

年代	北部九州（中島2001）	中九州（中村（1996）	南九州（松田2004）
８世紀	甕Ⅰ類　甕Ⅱ－１類	胴が張るタイプ	
	甕Ⅱ－２類		
	甕Ⅱ－３類	胴が張らないタイプ	甕１類、２類
９世紀			
	甕Ⅱ－４類		甕５～８類
	甕Ⅲ類		
10世紀			
11世紀	鍋型		鍋型

3．マツノト遺跡出土土師器の推定年代

九州における古代土器生産の研究は、大宰府における食器様相の変遷との比較検討、共伴広域流通品と遺構の新旧関係の分析によって進められてきた。したがって、北部九州以外の地域における土器構成の変遷は、大宰府編年に沿って組み立てられているわけではなく、大宰府編年を検証する形で分析が行われていることがわかる。この点を確認した上でマツノト遺跡出土土師器の年代を推定してみたい。

マツノト遺跡で検出された高台付椀は、回転台成形によって製作されており、九州で回転台土師器が出現する８世紀以降の所産であることは間違いない。

体部が曲線的で、器壁が薄く、器高に比して高台が高い特徴的な形態は、山本分類中碗ｃ２、中島分類椀Ⅱ類、網田第６段階、中村分類Ａｂ１類と類似するものである（図４）。これらは金属器および瓷器系土器の影響を受けたものと想定されており、９世紀後半から10世紀中頃におさまる資料である。赤彩が施された椀もこの頃のものであろう。

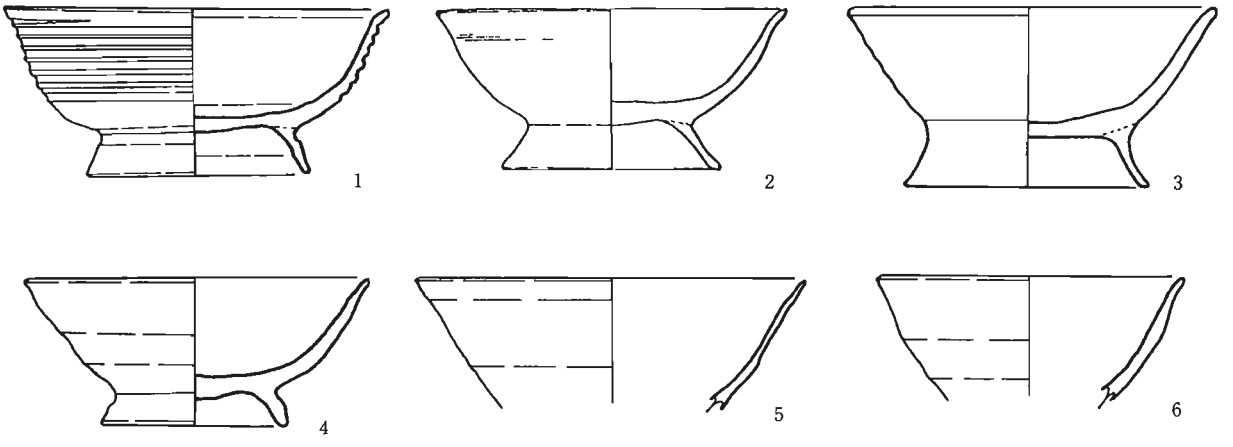

図４　九州出土の土師器椀（Ｓ＝１／３）

１：大宰府史跡70次調査SK1800（福岡県）　２：沈目遺跡（熊本県）　３：久保遺跡（熊本県）
４：薩摩国府跡（鹿児島県）　５、６：西ノ平遺跡（鹿児島県、赤彩碗）

筆者が実見した限りの資料（福岡県太宰府市前田遺跡３次調査資料、鹿児島県薩摩川内市成岡遺跡、大島遺跡、鹿屋市榎崎Ｂ遺跡）中には、胎土、混和材、色調が類似する資料は見出せず、製作地を確定するには至らなかった。しかし、直線的形態から曲線的形態への変遷は、中九州、南九州でも確認されており、九州一円の生産動向として把握できる。したがって、これらの産地がいずれの地域であったとしても、その形態的特徴から９世紀後半から10世紀中頃に位置付けられると考えられる。

また土師器甕は、古墳時代における在地土器系統のものが８世紀代まで製作されるが、８世紀後半代には胴部が直線的に延びる律令時代的なものが出現する。これらは、供膳具と比べて存続年代が長いため、ある程度の年代幅を想定せざるを得ない。また、地域によって独自の型式変遷を辿るようであり、マツノト遺跡出土品の産地を確定させない限り確実な年代の確定は不可能である。律令的な甕が一般化する９世紀代から煮沸形態が鍋形へと変化する11世紀以前、すなわち９世紀から10世紀代の所産としておきたい。

以上の検討から、マツノト遺跡出土土師器の年代は、９世紀から10世紀代、中でも９世紀後半から10世紀前半代の可能性が高いと考えられる。

おわりに

マツノト遺跡出土土師器に焦点を絞り、その年代観について私見を述べたが、今後琉球列島から出土する外来土器（土師器、須恵器、黒色土器、焼き塩壷など）を総体的に検討する必要がある。また、九州各地の資料と胎土、混和材の比較を行うことにより、それらの産地を確定させることも重要であろう。以後、研鑽を積みたいと考えている。

謝辞

資料調査、文献検索にあたり次の方々および諸機関にお世話になりました。以下にご芳名を記し、末筆ながら感謝申し上げます（敬称略、五十音順）。

網田龍生、川口雅之、新里貴之、新東晃一、杉井　健、中村和美、中村友昭、中村直子、中山清美、東　和幸、中島恒次郎、松ヶ野　恵、宮田栄治、鹿児島県立埋蔵文化財センター、鹿児島大学埋蔵文化財調査室、熊本大学文学部考古学研究室、太宰府市教育委員会

（参考・引用文献）

網田龍生　1994「奈良時代肥後の土器」『先史学・考古学論究』龍田考古会　pp.197～254

網田龍生　1994「肥後における回転台土師器の成立と展開」『中近世土器の基礎研究』X　pp.93～117

池畑耕一　1998「考古資料から見た古代の奄美と南九州」『列島の考古学』 pp.733～743頁　渡辺誠先生還暦記念論集刊行会

高梨　修　2004「琉球弧における土師器・須恵器出土遺跡の分布（予察）」『古代・中世のキカイガシマ』 喜界島郷土研究会・九州国立博物館誘致推進本部　pp.41～48

中島恒次郎1992「大宰府における椀形態の変遷」『中近世土器の基礎研究』Ⅷ　pp.113～148

1995「九州北部」『概説　中世の土器・陶磁器』 真陽社　pp.187～196

2001「大宰府における土師器甕の変遷」『大分・大友研究会論集』pp.1～9

中村和美　1994「鹿児島県（薩摩・大隈国）における平安時代の土器－土師器の変遷を中心に－」『中近世土器の基礎研究』pp.149～171

1996「古代前期の煮沸具－肥後・日向・薩摩・大隈－」『古代の土器研究 - 律令的土器様式の西・東４－煮沸具－』古代の土器研究会　pp.188～193

1997「鹿児島県における古代の在地土器」『鹿児島考古』31　鹿児島県考古学会

前川威洋1978「土師器の分類および編年とその共伴土器について」『福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告書第８集（下）』福岡県教育委員会

松田朝由　2004「第１節　土器の製作技術と土器様相」『高篠遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書71

松本健郎他　1980『生産遺跡基本調査報告書Ⅱ』熊本県文化財調査報告第48集

横田賢次郎・森田勉1978「大宰府出土の土師器に関する覚え書き」『九州歴史資料館研究論集』

山本信夫　1988「大宰府における古代末から中世の土器・陶磁器－10～12世紀の資料（１）本文編－」『中近世土器の基礎研究』Ⅳ　pp.183～202頁

山本信夫・山村新榮　1997「九州・南西諸島」『国立歴史民俗博物館研究報告』第71集　pp.237～310